

仙台藩茶道石州流清水派の特徴（その一） 仙台藩主と当流の茶の湯



仙台藩茶道石州流清水派宗家
十世 大 泉 道 鑑

文武両道に優れた武将として知られた仙台藩祖伊達政宗公は、「伊達者」という有名な言葉の通り「格好良い」事（美）を生涯追及し続けたと思われる。また、奥州に理想の国を造る事に傾注した際にも、高い教養と洗練された美意識を最大限に生かし、それに当ったに違いない。この事は、政宗公が仙台城（青葉城）の築城や神社仏閣の造営・再建に力を注ぎ、桃山文化の華を開かせた事からだけでなく、仙台藩の学芸・芸術の師に、当時、一流の人物が多く召し抱えられていた事からも、窺い知る事が出来る。言うまでもない事であるが、政宗公は茶道にも造詣が深く、茶道方に於いても茶道頭一世清水道閑等、優れた人材を登用していた。

政宗公以降の伊達文化、特に当流に大きな影響を与えたのは、全国的にも数寄大名として名高い四代仙台藩主伊達綱村公である。綱村公の茶道師範は、初め当流の茶道頭二世清水道閑であったが、道閑没後その後継者には馬場道斎（後の茶道頭三世清水道竿、石州流清水派の開祖）を自ら指名し、三世から本格的に石州流茶道の指南を受けた。綱村公は生涯、当流の茶道の真髄を探究する事に並々ならぬ情熱と飽く無き執念を示し、遂にその奥義を極めた。伊達家が編纂した伊達家の正式な歴史書である「伊達治家記録」（歴代の藩主の治家記録の総称）の内、綱村公の「肯山公治家記録」に記述された茶道に関する記録や酒井巖著「伊達綱村茶会記」によると、藩主が茶会を頻繁に催し、その回数は夥しい数に達している。このような事からも、綱村公の茶道に対する真摯な姿勢を容易に想像する事が出来る。また、綱村公は家臣からしばしば茶会に招かれ、それに気軽に応じていたようである。以上述べたように綱村公が、当流の誕生に深く関わり、その後も当流の発展に多大な貢献をした事は、特筆すべき事柄である。なお、他の藩主の仙台藩茶道に対する寄与については、紙面の都合により割愛さ

せて頂いた。

さて、このような仙台藩の茶道の一切を取り仕切って来たのが、歴代の茶道頭（宗匠）であり、また宗匠には藩主の茶道指南と言う大役を果す責任も併せて持っていたのである。藩主に茶を差し上げる際の手前及び台子飾には、当然ながら歴代の宗匠達が並々ならぬ工夫を凝らしていた。そのため、この点が当流の特徴として注目し値すると思われるので、藩主を招く茶会について次に簡潔に説明したい。

仙台藩では歴代の藩主が数寄屋或いは家臣の邸にお成りの時、及び勅使来訪の際には「極真の手数（手前）」で濃茶を差し上げるのが慣例であった。「極真の手数」の台子の飾りは、「七ツ飾」と言い、一般に公開される事はめったにない。勿論、「極真の手数」は昔から門外不出とされて来た。濃茶の後で薄茶を差し上げる場合には、肩衝が薄茶器として用いられる点が趣があり、興味深い。

藩主が奥方同伴でお成りの場合には、通常「二連天目台子の手数」で差し上げる事になっていた。また、藩主の所望で平手前の台天目で差し上げたり、並の濃茶茶碗



図1. 仙台藩茶道の茶道頭・宗家累代伝来の台子及び茶道具（十世大泉道鑑所蔵）

を用いる事もあり、勿論小間の茶の湯も行なわれた。

ところで、明治時代の初頭まで残っていた青葉城内の残月亭の茶の湯はどのようなものであったろうか。石州流の茶の湯の手前は典型的な大名茶と言われるだけあって茶道具は勿論の事、その扱い方もこの上もなく優美で上品である。前に述べた当流の手数が、今日でも昔ながらのままであり、当時と些いささかも変っていない点が当流の最大の特徴である。また、図1に示した台子及び茶道具は仙台藩茶道の茶道頭・宗家(図2)累代伝来のもので、八世清水道鑑から九世落合道鑑を経て十世の私に譲られた。

仙台藩茶道頭

清水道閑(一世) — 動閑(二世) —

道竿(三世) — 道簡(四世) — 道斎(五世) —

仙台藩茶道頭・宗家

道看(六世) — 道幹(七世) — 道鑑(八世) —

宗家

落合道鑑(九世) — 大泉道鑑(十世)

図2. 仙台藩茶道の歴代の茶道頭・宗家(宗匠)

この台子は昔の正式な寸法で、京疊に合わせて製作されており、また、長盆も昔の寸法通りである。これらの理由から、現在でも当流のこのような茶会によって、藩主が深く関わった茶の湯の当時の様子を少なからず偲ぶ事が出来、同時に大名気分も味わうことも可能であると言えよう。

